

# 王権即位式と婆羅門

## ——王族祭主とソーマ祭——

大 島 智 靖

### 1. 序

ヴェーダ祭式が確立する以前の原初的な儀礼は、大家長あるいは部族長（家系は王族、婆羅門、或はその両方）を中心に彼を取り巻く祭官たちが執行していたと考えられ、遡るほど婆羅門・王族の区別は曖昧になる傾向が見られるという。一方 Br. 文献時代、祭主は婆羅門第一であるが、裕福な王族も競合的に意識された<sup>1)</sup>。王権儀礼はソーマ祭の複合形式をとって確立したが<sup>2)</sup>、婆羅門が祭式を掌握しつつ如何に王族祭主を取り込むかという問題は重大な関心事であった。王権儀礼は祭主＝王族が前提である。本稿では、Rājasūya の潔斎を中心に分析し、王族祭主について考察する。

### 2. 灌頂ソーマ祭の潔斎

Rājasūya は複数回ソーマ祭を繰り返す。核となるのは灌頂のソーマ祭 (Abhiṣecanīya) である。その潔斎は基本形のアレンジである。

#### 2.1. Dīkṣaṇīyā-iṣṭi の神格と供物

MS IV 3,9:48,16: *áthaitán maitrābārhaspatyám̐. satyám̐ vái mitró bráhma bṛhaspátih̐. satyám̐ caivá bráhma cālábhya dīkṣate. kṣatráṁ vái mitró. bráhma bṛhaspátih̐. kṣatráṁ caivá bráhma cālábhya dīkṣate.* 次に、この Mitra と Bṛhaspati のための [供物]。Mitra は真実なのだ。Bṛhaspati は *bráhman̐* である。(祭主は) 他ならぬ真実と *bráhman̐* とを掴まえて、潔斎する。Mitra は *kṣatrá* なのだ。Bṛhaspati は *bráhman̐* である。他ならぬ *kṣatrá* と *bráhman̐* とを掴まえて後、潔斎する。

Rājasūya では対象神格は Bṛhaspati と Mitra に改変され (基本形: Agni-Viṣṇu), 後述 (→4) の議論と同調する。

#### 2.2. Tārpya 衣

Rājasūya 全体の解釈学においても王の「再生」は重要テーマであるが<sup>3)</sup>、本来、

(254)

王権即位式と婆羅門 (大 島)

潔斎は神々の供物及び胎児となり再生することに意義がある。ここで特徴的な祭具：Tārp̄ya, Uṣṇīṣa そして Adhīvāsa が登場し<sup>4)</sup>、祭主は胎児となる。ŚB は黒 YV とは大きく異なり、解釈の幅を広げて王族の立場を詳説する。

MS IV 4,3:52,12: <kṣatrāsya yónir asi. kṣatrāsyaólbam asi. kṣatrāsya nābhir asī><sup>5)</sup> *ítī. -índro vái yád ájāyata tāsya vá eṣá yónir āsīd yát tārpyám, úlbam pāṇḍarām. nābhir uṣṇīṣaḥ.* 「君は kṣatrā の母胎である。君は kṣatrā の羊膜<sup>6)</sup> である。君は kṣatrā の臍帯である」と [唱える]。Indra が生まれたとき、彼の母胎はこれ、すなわち Tārp̄ya であった、羊膜は Pāṇḍara<sup>7)</sup> [であった]。臍帯は Uṣṇīṣa (頭巻) [であった]。

### 2.3. 祭主を生む——胎児化

ŚB V 3,5: (20) *áthainam vásāmsi páridhāpayati. tát tārpyám iti váso bhavati. tásmint sársvāni yajñarūpāni niṣyūtāni bhavanti. tát enam páridhāpayati <kṣatrāsyaólbam asī><sup>8)</sup> *ítī. tát yád evá kṣatrāsyaólbam, táta evānam etáj janayati.* (21) *áthainam pāṇḍvam páridhāpayati <kṣatrāsya jarāyv asī> *ítī.* — (22) *áthādhīvāsám prátimuñcati <kṣatrāsya yónir asī> *ítī.* — (23) *áthoṣṇīṣam samhṛtya purástād ávagūhati <kṣatrāsya nābhir asī> *ítī. tát yāviva kṣatrāsya nābhis, tám evāsminn etád dadhāti.* (20) 次に [祭官は] 当人 (祭主) に衣たちを着せる。そこで Tārp̄ya と呼ばれる布が用いられる。その [Tārp̄ya] には一切の祭式の似姿たちが織り込まれている。それを当人に着せる、「君は kṣatrā の羊膜である」と唱えて。そのときまさに kṣatrā の羊膜であるもの、そこから当人をこうして生むことになる。(21) 次に、当人に Pāṇḍva<sup>9)</sup> を着せる、「君は kṣatrā の胎盤 (胎児付属器官) である」と唱えて。— (22) 次に上掛けを着せる、「君は kṣatrā の母胎である」と唱えて。— (23) 次に Uṣṇīṣa を引き寄せて、前にずらし下げ [臍を隠す]<sup>10)</sup>、「君は kṣatrā の臍である」と唱えて。そのときまさに kṣatrā の臍帯であるもの、他ならぬそれをこうしてこの者に置くことになる。****

Uṣṇīṣa は潔斎者の衣の一部として基本形 Agniṣṭoma でも用いられるが、胎児構成器官の同定は異なる<sup>11)</sup>。(21) のマントラは Vājasaneyin 派のみに伝わり、白 YV の独自性が見出される。「祭主 = 胎児を生む」という祭官からの視点：janayati の使用が興味深い。Agniṣṭoma の Br. における「祭主 = 胎児が生まれる」([pra-]jāyate) と対応し<sup>12)</sup>、祭主が婆羅門前提であったことが示唆される。また王族祭主が坐する虎の毛皮 (vyāghra-/śārdūra-carmān-) は基本形の潔斎において胎盤の役割を果たした黒羚羊の毛皮 (kṣṇājīnā-) を想起させるが、共通要素は無く、ソーマ、虎、蛇<sup>13)</sup> が共有する「興奮」(tviṣ-) を得るために用いられる。

## 3. 婆羅門の王族観

婆羅門が王族に対して侮蔑的態度を取っていたことは、以下の Rājasūya の季節祭終了後に行う穀物諸献供に関する TB の記述から明らかである。

TB I 7,2,5-6: *bahú vai púruṣo 'medhyám úpagacchati. — pavitraṃ vai hiraṇyam. punāty eváinam. bahú vai rājanyó 'ṇṭam karoti. úpa jāmyái hárate, jināti brāhmaṇám.* 人間は供儀に相応しくないものに近づくことが多いのだ。— 黄金は清め具なのだ。まさに当の [祭主] を清めることになる。王族は虚偽を為すことが多いのだ。彼は [婆羅門との] 近縁のために (食物を) 受け取り<sup>14)</sup>、婆羅門 [格] を獲得する。

王族はソーマ祭祭主として、婆羅門同様の所作を行いその「格」を得て俗人から脱する。

#### 4. *brāhmaṇ-*と *kṣatrā* —— *brāhmaṇ* の優位性

婆羅門と王族の優劣は、*brāhmaṇ* と *kṣatrā* によって繰り返して説かれる<sup>15)</sup>。

MS IV 3,8:47,6: *bārhaspatyás carúr brahmāṇo gṛhá iti. brāhma vai bṛhaspátir. bṛhaspátir-purohitam khálu vai rāṣṭrám ṛdhnoti. brāhma vā etát purástād rāṣṭráśyátyauhīd. átho brāhmaṇa evá rāṣṭrám ánukaṃ karoti.* 「Bṛhaspati のための粥が [献供される]、Brahman 祭官の家で」と [言われる]。Bṛhaspati は *brāhmaṇ* なのだ。周知の通り、Bṛhaspati を筆頭祭官とする王国は栄えるのだ。こうして *brāhmaṇ* を、王国の前方に配置したことになるのだ。また一方で、王国を他ならぬ *brāhmaṇ* に従属させることになる。

筆頭祭官 Purohita が王族祭主の分身としてその役割を果たす。この点にも、王族に祭式を完全掌握させまいとする婆羅門の戦略がある。

#### 5. Aitareya-Brāhmaṇa における王族祭主

AB には Rājasūya の概念に関する議論の集積が遺っている。YV 文献との関連性に焦点を当て、以下に分析する。

##### 5.1. AB における *brāhmaṇ-* と *kṣatrā-*

AB VII 19,4: *athainat kṣatram anvāgachat. tad abravīd "upa māsmin yajñe hvayasv<sub>a</sub>-" eti. tat "tath<sub>a</sub>-" ety abravīt. "tad vai nidhāya svāny āyudhāni brahmaṇa evāyudhair brahmaṇo rūpeṇa brahma bhūtvā yajñam upāvartasv<sub>a</sub>-" -eti.* すると *kṣatrā* がそれ (*brāhmaṇ*) につき従った。そこで [*kṣatrā* は] 言った、「君はこの祭式に私を呼べ」と。すると [*brāhmaṇ* は] 「そのように」と言った、「では君は、自身の武器たちを置き、他ならぬ *brāhmaṇ* の武器たちを携え、*brāhmaṇ* の似姿を備え、*brāhmaṇ* となって後に祭式に近寄れ！」と。

AB は上記 4 のテーマを神話形式で説く。王族祭主の俗人性を強調してはいるが、寧ろ王族の祭式介入を正統化し奨励する意図があった可能性もある。続く箇所は YV との関係性を強く示唆する。

(256)

## 王権即位式と婆羅門 (大 島)

AB VII 22,4: *brahma vā eṣa prapadyate yo yajñam prapadyate. brahma vai yajño. yajñād u ha vā eṣa punar jāyate yo dīkṣate. tam brahma prapannaṃ kṣatram na parijināti.* 祭式に踏み込む者は、*brāhmaṇ* に踏み込むのだ。祭式は *brāhmaṇ* なのだ。また一方、潔斎する者は祭式から再び生まれるのだ。*brāhmaṇ* に等しい彼を、*kṣatrá* は打ち負かさない。

この見解は Agniṣṭoma において、ŚB III 2,1,40 に述べられる見解と一致する。また同箇所では ŚB は「*brāhmaṇ* から生まれる」とも説く<sup>16)</sup>。

AB VII 24,1: *sa hodavasyann eva kṣatriyatām abhyupaiti.* そして彼はまさに [ソーマ祭から] 撤退しつつ、クシャトリヤ性に近づくことになる。

上記の記述では、一時的な婆羅門からクシャトリヤに戻ることを示される<sup>17)</sup>。ソーマ祭では最後の沐浴：Avabhṛtha によって聖から俗への支度が完了するが<sup>18)</sup>、AB では Punarabhiṣeka の執行が説かれる<sup>19)</sup>。

## 5.2. 王族祭主と Dīkṣita

AB VII では「祭主がクシャトリヤの場合の措置」について諸議論が展開されるが、これは婆羅門が祭式を掌握しつつも王族祭主の祭式介入に正統性を与えたことを示唆する。以下の潔斎に関する議論は YV に対応部分がある。

AB VII 25 (1) *athāto dīkṣāyā āvedanasyaiva. tad āhur “yad brāhmaṇasya dīkṣitasya brāhmaṇo ‘dīkṣiṣṭa-’ eti dīkṣām āvedayanti, katham kṣatriyasyāvedayed” iti.* (2) *“yathāivaitad brāhmaṇasya dīkṣitasya brāhmaṇo ‘dīkṣiṣṭa-’ eti dīkṣām āvedayanty, evam evaitat kṣatriyasyāvedayed purohitasyārṣeṇa-” eti.* (1) 次にここから、他ならぬ潔斎の知らせについて、それについて [人々は] 言う、[[人々が] 潔斎に入った婆羅門の潔斎を『婆羅門は潔斎に入った』と知らせるとき、[祭官は] クシャトリヤのをどのように知らせるべきか」と。(2) [また続いて言う、]「このとき、[人々が] 潔斎に入った婆羅門の潔斎を『婆羅門は潔斎に入った』と知らせるように、まさにそのように [祭官は] クシャトリヤのを知らせるべきである、筆頭祭官のリシの家系と共に」と。

ここでは「婆羅門は」という主語がクシャトリヤである祭主と合致しない矛盾を、筆頭祭官を干渉させることにより解決する。潔斎が婆羅門前提であることを確認できる文脈であるが、一方基本形における当該の文言を分析すると、そこに時代的背景の変化があったことが判明する。

## 5.3. Dīkṣita を諸世界に知らせる——Agniṣṭoma における Dīkṣita の公言

基本形の Agniṣṭoma において<sup>20)</sup>、YV では、祭主が潔斎に入ったことを神々と人間たちに公言することを規定する。MS III 6,9:72,1-4 及び KS XXIII 5:80,4 では潔斎祭主の家系を確認するのみであるが、TS VI 1,4,3 及び ŚB III 2,1,39-40 では「この婆羅門は」と明示する。上記 AB はこの TS と ŚB の規定を前提としている。

さらに ŚB は (40) において「この者の出自はちょうど不確定になっているのだ。——『ラクシャスたちは女に付きまとう。そしてそのとき他ならぬラクシャスたちが精液を置き定める』と。さてここで, *brāhmaṇ* から [生まれる者], 祭式から生まれる者は明確に生まれる。それゆえ (祭主が) 王族であろうと庶民であろうと, 『婆羅門は』とだけ唱えるべきである」と論じ, 白 YV の時代は既に祭主として王族・庶民階級が奨励されていたことが確認される。

## 6. まとめ

以上, 婆羅門による王族祭主への視点について検討した。諸王権儀礼がソーマ祭の枠組の中で解釈される以上, 自身の優位性を崩すまいとする意識と, 王族が持つ俗人性に対する懸念が Br. において常に働いていたことが明らかである。筆頭祭官 Purohita の介入は, 自身の聖域を保持する上で決定的な役割を果たしたが, 同時に, 王族祭主に神々の一員となる体験の意義を強調し, 財源として積極的に祭式に取り込もうとした姿勢の表れとも考えられる。

- 1) 阪本 (後藤) 2005, 946; 後藤 2008, 62, 72.      2) RV 編纂期以前のソーマ祭の出発点については諸説ある。Proferes 2007, 5, n. 8.      3) Heesterman 1957, 7, 33, 47.  
 4) Rau 1971, 29. これらの布衣は動物犠牲の際にも用いる。潔斎祭主 = 供物に関連する。Uṣṇīṣa で犠牲獣の胎児を包む: ŚB IV 5,2,7. Tārpya と Adhivāsa (共に敷物) の上で馬を屠る: TB III 9,20,1.      5) MS II 6,9:69,3.      6) Nishimura 2012.      7) 未染の羊毛衣。Hoffmann 1956, 7. ŚB: Pāṇḍva に相当。→ 2.3.      8) VS X 8.      9) 註 7.      10) *ava-gūhati*: Dīkṣita の腰布 (*nīvi-*) にも *údgūhate* (衣をたくし上げて腰に巻く) とある: ŚB III 2,1,15-17.      11) Ōshima (2011, 71-73) に詳述.      12) Ōshima, forthcoming, 3-4.      13) MS IV 4,4:54,3 及び TS V 2,9,6 参照.      14) 通常, 王族に献供されたものを食べる資格はない: *ahutād-*. 自身の '*ardhātman-*' である Brahman 祭官に食べさせる。AB VII 26,1.      15) 同様に, 新満月祭: TS II 6,2,5. Ratnin: TB I 7,3,2; Pārthiva: 7,7,4. 王権の歌: AV III 19,1. 王の宣言: MS II 6,9:69,8, IV 4,3:53,7, ŚB V 3,3,12. Daśapeya: PB XVIII 10,8 も参照.      16) 黒 YV の概念 (= 小屋を母胎とする) との対比は重要。Ōshima (2011, 70-80) を参照.      17) 戻ってからも祭式の効力が自身に帰属するよう祈願: 阪本 (後藤) (1996, 869) 参照.      18) 阪本 (後藤) (2015, 15) 及び Ōshima (forthcoming, 3-4) も参照.      19) Avabhṛtha 後に行う灌頂で, AB VIII 5,1-2 に明示される。Fujii (forthcoming, 8-9) を参照.      20) 紙面の制約上全て提示できないので, 詳細は Ōshima (2011, 80-82) 参照.

### 〈略号及び一次文献〉

AB = *Das Aitareya Brāhmaṇa*. Ed. Theodor Aufrecht. Hildesheim: Georg Olms Verlag, 1975.  
 AV = *Atharva Veda Sanhita*. Ed. R. Roth and W. D. Whitney. Berlin: Ferd. Dümmlers Verlagsbuchhandlung, 1856. Br. = *Brāhmaṇa*. KS = *Kāthaka: Die Saṃhitā der Kātha-Śākhā*.

(258)

## 王権即位式と婆羅門 (大 島)

Ed. Leopold von Schroeder. 3 vols. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, 1970–1972. MS = *Maitrāyaṇī Saṃhitā*. Ed. Leopold von Schroeder. 4 vols. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, 1970–1972. PB = *Tāṇḍyamahābrāhmaṇa*. Ed. A. Cinnaswāmī Śāstrī. 2 vols. Kashi Sanskrit Series 105. Benares: Chowkhamba Sanskrit Sansthan, 1935–1936. RV = Ṛgveda. TS = *Die Taittirīya-Saṃhitā*. Ed. Albrecht Weber. 2 vols. Indische Studien 11–12. Hildesheim: Georg Olms Verlag, 1973. ŚB = *The Śatapatha-Brāhmaṇa*. Ed. Albrecht Weber. Chowkhamba Sanskrit Series 96. Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1997. ŚS = Śrauta-Sūtra. TB = *Kṛṣṇayajurvedīyaṃ Taittirīyabrāhmaṇam*. Ed. Ānandāśramasaṃskṛtagranthāvaliḥ. 3 vols. Ānandāśramasaṃskṛtagranthāvaliḥ 37. Poona: Anandashram, 1979. VS = *The Vājasaneyi-Saṃhitā*. Ed. Albrecht Weber. Chowkhamba Sanskrit Series 103. Varanasi: Chowkhamba Sanskrit Series Office, 1972. YV = Yajurveda.

## 〈二次参考文献〉

- Fujii, Masato. Forthcoming. “Soma and Surā: The Sautrāmaṇī in the Vedic Coronation Rituals.” Paper presented at the 6th International Vedic Workshop, 2014, 1–15.
- 後藤敏文 2008 「古代インドの祭式概観」『総合人間学叢書』（東京外国語大学）3: 57–102.
- Heesterman, J. H. 1957. *The Ancient Indian Royal Consecration*. 's-Gravenhage: Mouton.
- Hoffmann, Karl. 1956. “Notizen zu Wackernagel-Debrunner, Altindische Grammatik II,2.” *Münchener Studien zur Sprachwissenschaft* 8: 5–24.
- Nishimura, Naoko. 2012. “*ūlba-* and *jarāyu-*: Foetal Appendage in the Veda.” *Journal of Indological Studies* 24/25: 169–185.
- Ōshima, Chisei. 2011. “*Dīkṣā* in the Agniṣṭoma: Some Symbolic Aspects of the Sacrificer’s Role.” *Journal of Indological Studies* 22/23: 61–86.
- . Forthcoming. “On the Concept of the Soma Sacrifice: From the Perspective of the Consecrated Sacrificer.” Paper presented at the 6th International Vedic Workshop, 2014, 1–15.
- 大島智靖 2014 「*Dīkṣā* と *Avāntaradīkṣā* ——ソーマ祭祭主の超人性とその論理——」『印度学仏教学研究』63 (1): 286–291.
- Proferes, Theodore N. 2007. *Vedic Ideals of Sovereignty and the Poetics of Power*. New Haven, Connecticut: American Oriental Society.
- Rau, Wilhelm. 1971. *Weben und Flechten im Vedischen Indien*. Mainz: Verlag der Akademie der Wissenschaften und der Literatur.
- 阪本（後藤）純子 1996 「*iṣṭā-pūrtā-* 『祭式と布施の効力』と来世」『今西順吉教授還暦記念論集インド思想と仏教文化』春秋社, 882–862 (67–87).
- 2005 「王族と Agnihotra」『印度学仏教学研究』53 (2): 58–64.
- 2015 『生命エネルギー循環の思想——「輪廻と業」理論の起源と形成——』RINDAS 伝統思想シリーズ 24, 龍谷大学現代インド研究センター.

(本稿は JSPS 科学研究費補助金 [基盤研究 C (26370053)] による研究成果の一部である.)

〈キーワード〉 潔斎, ソーマ祭, ヴェーダ, 婆羅門, 王族, Rājasūya, Agniṣṭoma, *Dīkṣā*  
(東京大学死生学応用倫理センター特任研究員)